

ニホンコウノトリの保護と観光の可能性

周 達 生

I はじめに

「エコツーリズム」という観光用語がまだ現れていなかった1971年の7月、タンザニアへ行って来た。筆者のこれまでのフィールド・ワークは、すべてが観光とは無縁のものであったが、観光の話題に結びつけられるものも少なからずある。このタンザニアでのフィールド・ワークも、観光の話題に結びつけられないわけではないと思われる。

当時の渡航は、1ドル360円の時代で、黄熱病の予防注射なども必要であった。神戸からの出発の場合は、わざわざ成田までいかねばならなかった。成田からインド航空でボンベイ（今はムンバイ）へ、そこから東アフリカ航空に乗り換えた。今日、他地域はもちろん、アフリカ渡航も航空券が相対的にやすくなったが、単身でいったタンザニアへの渡航費はかなり高くつくものであった。

そのアフリカ渡航がまだ珍しかったからか、日本にもどってから、地元の神戸新聞に5回連載で「タンザニア・ノート」¹⁾を書くことになった。

そのうちの〈1〉「観光立国」と、〈4〉「ゲーム・パーク」の写真を除く本文だけをここに再録することから始める。

〈1〉「観光立国」

キリマンジャロ国際空港

遠くキリマンジャロの雪の頂が、雲にさえぎられて見えかくれする。私たちのランドローバ（四輪駆動ジープ）は、北部高地のモシからゲーム・パークの根拠地、アルシアに向かっていた。その中間地点、ややアルシア寄りの付近からは、それまで延々と続いていたトウモロコシ畑が途切れ、一面の原野になった。そこに、年末完成する予定の「キリマンジャロ国際空港」が見えた。まだコントロール・タワーとラウンジしかできていないが…。

東アフリカ三国（ケニア、ウガンダ、タンザニア）の売り物は、いうまでもなく“サハリ”。その旅の玄関口は、ケニアの首都ナイロビだ。ナイロビに着いた者は、

ケニアの「ゲーム・パーク」（ナショナル・パークとゲーム・リザーブの総称）を見てから、今度は国境越えに北部タンザニアのセレンゲティなどへ行く。帰りは、また振り出しのナイロビに戻る。だから、外貨の大半はケニア側に落ちてしまい、タンザニアは、おこぼれちょうだいの形だ。

タンザニアとしては、首都ダルエスサラーム起点のサハリを宣伝、外貨獲得に乗り出しているが、首都から「北部サーキット」への道は遠すぎる。国際空港の完成を急いでいるのは、ナイロビ経由ではなく、直接観光客を北部サーキットへ誘致しようとするものだ。

「心を捨てる」奴隷港跡

首都ダルエスサラームの周辺には、現地の人々が開く青空市場やジンジャントロップス（アウストラピテクスと並び有名な猿人化石）のある国立博物館、アラビア文化のクンドゥチ遺跡、諸部族の伝統的な家屋を集めた村落博物館など見るものが多い。広い敷地にブーゲンビリヤが咲くダルエスサラーム大学や「サハリ」ならぬ「シーフェリ」という新造語で、ヤシとサンゴ礁の海浜を宣伝している。

この中では、マコンデ族の彫刻実演や伝統舞踊などのアトラクションがある村落博物館が成功。観光では先輩格のケニアも刺激されて、目下適地を捜しているほどだ。

なによりも私の心をとらえたのは、首都から、少し離れた旧都バガモヨだ。「バガモヨ」とは「心を捨てる」という意味のスワヒリ語である。アラビア人に捕えられた奴隷は、この地から対岸のザンジバル島に送られ、外地に売られていった。「心を捨てる」というスワヒリ語に、私は長い奴隷史の響きが残っていると思った。

またバガモヨは、バートンやスピーク、リビングストンを捜しに来たスタンレーら数多くの探検隊の起点であった。だからこの見ものは、アラビア人遺跡、奴隷港の跡、リビングストン記念教会など多い。

ユニークな社会主義への道

タンザニアは社会主義国だが、観光に力を入れている。政府指定のホテルがどんどん建ち、外貨を導入したのも多い。キリマンジャロホテルは、イスラエルからといったぐあい。

一方では、政府の観光立国政策への批判もある。「資本主義の毒にやられる」と懸念するダルエスサラーム大学関係者の批判がその一つ。

その観光立国策も緒についたばかり。ンゴロンゴロの大噴火口へ動物を見に行こうとしたとき、長距離列車の予約をしようとしたとき、係員のペーパー・ワークの能率の悪さには驚かされた。だから、ゲームのワーデン養成学校の設立とかホテルマンの海外留学などの改善策が進められている。

現実に観光による外貨は年々ふえている。政治的独立から今度は経済的独立へ。道のりは遠いが、タンザニアはきっとユニークな社会主義建国をやりとげることだろう。

〈4〉「ゲーム・パーク」

チエッチエバエ

東アフリカ鉄道の車窓の景観は、行けども尽きぬ原野であった。ときどき小さな村落が自給の畑をともなっていて、現れたかと思うと、また消える。首都から北部高地のモシまでの23時間期待の動物は家畜を除けば、サル2匹、カモシカ2頭のみ。アフリカといえども、人の立ち入る所には動物はとどまろうとしない。

アルシアを経て、車ではいったレーク・マニヤラは、ソーダ湖を囲む森林地帯。ここで初めてキリン、ゾウ、ヒヒ、インパラなどにあう。カバは夜行性で、一頭が鼻だけ出していた。2時間走りまわって、やっとアカシアの木に登っているライオンを発見。木登りライオンだ。こことウガンダの一部でだけ木に登る。チャンスに恵まれば、数頭のときもあるが、その日は一頭きり。夢中になって写真をとっていたら、これまで全然いなかったチエッチエバエが十数匹車内に侵入していた。眠り病を媒介するこわいやつ。セーターでたたかたが、新しいのがまた侵入する。イエバエに似ているが、イエバエはなめる口、こっちはアブのようなさす口。休止のときの羽のたたみ方もイエバエと異なる。さされなかったが、公衆衛生の普及で病原体を持つのが少なくなっており、1回ぐらいさされても発病する恐れがないという。ここへ来るまで全然お目にかかれなかったし、その後も再会できなかった。2匹標本に持ち帰ったが、それが唯一の採集のチャンスになった。

セレンゲティ

サバンナのセレンゲティではテントに寝る。ダチョウは神経質で、追ってもどンドン逃げる。ワートホッグもあのシッポをピンと立てて逃げていく。ライオン、トムソンガゼル、グラントガゼル、バッファロー、トビ、ウシカモシカなどがカメラにおさまるが、今は、乾期で頭

①ンゴロンゴロのシマウマとウシカモシカ

数は少ない。六月の雨期あけでは、有名なセレンゲティの大移動が見られるのであるが……。

私のねらいは大型動物だけではない。小型カモシカのディックディックは、やぶにすぐ逃げようとするが、写真にとった。タヌキのようなハイラックスは、分類上ゾウに近いめずらしいもの。とりわけうれしかったのは、ムクドリ大でアオゲラのような色彩を持つ鳥。望遠レンズを向けるとファインダーから消えたが、地中に穴を掘ってあって、それにもぐるのだ。鳥も穴も写真になった。博物館でしらべたら、1メートル以上の深さの所に卵を産む「トラドヒフォヌス・ダルナンディ」であった。

ンゴロンゴロ

世界一の大噴火口、そのふちにロッジがあり夕食にシマウマのステーキが出た。タンザニアの牛肉はまずいが、シマウマは神戸牛のステーキよりはるかにうまい。動物は保護されているが、ふえすぎると計画的に間引く。毎日シマウマかウシカモシカのどちらかがメニューになる。

翌日、四輪駆動車で噴火口の断がいをそろりそろりと下る。上から遠望したとき、波うちぎわの赤潮に思えたのは、数千羽のピンクのフラミンゴ。ここには湖水があるので、シマウマもウシカモシカも実に多い。ライオンがグラントガゼルを追跡する場面、1頭だけいたリードバックは、こんどは背中を出していたカバをとるのに、最後のフィルムをきつく巻き上げて切ってしまったのでパー。

サイはその後二番目の角が特に大きいのをとることができたが、かえすがええすも残念だった。

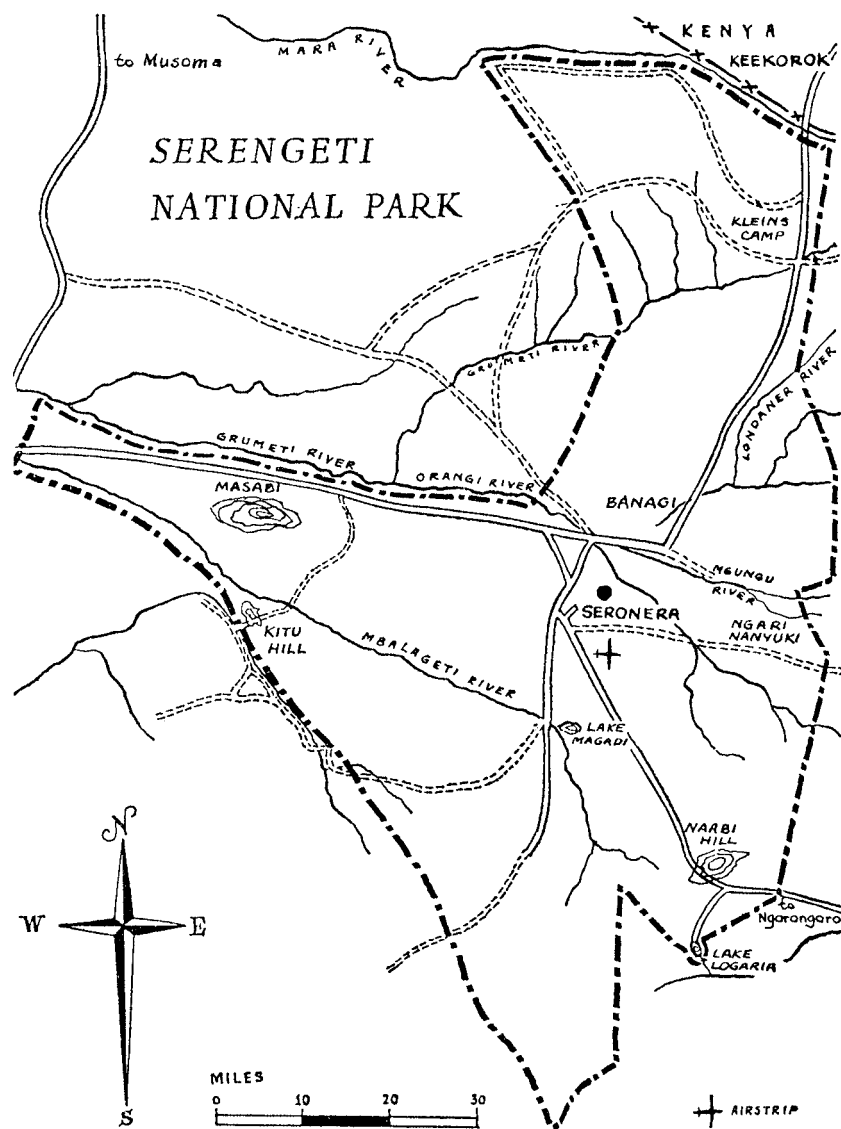
その後、タンザニアの首都は、ダルエスサラームからドドマに移転した。また、キリマンジャロ国際空港は、もちろんとくに完成した。タンザニアの動物を見るためには、昔と異なりずいぶん便利になったはずである。しかし、日本からの観光客はどれほどふえているのだから

う。筆者は単身でいったので、ゲーム・パークへは、主としてチャーターした乗用車を利用した。だから、それを別にしても、たとえばゴロンゴロの断がいを上下する場合は、そこの四輪駆動車に乗り換えねばならなかった。さもないと危険だからである。その大型の四輪駆動車は、天井がオープンになっており、欧米からの観光客数名と一緒にいる。他の四輪駆動車も数台前後して噴火口内に入っていたが、日本人らしい人はまったくまじってはいなかった。

ゲーム・パークのうち、ナショナル・パークは広大な地域を指定して人の居住を許しておらず、ゲーム・リザーブは人が住んでいた所を指定したので居住者はいる。どちらもかなりの面積のあるものばかりで、一例としてセレンゲティの場合を示すが（図参照）、広大な面積であることがよくわかる。その中では、野生動・植物の狩

猟・採集はおろか、骨化した動物の頭や角、枯草一本すら持ち出しではいけないことになっている（密猟はないわけではないが……）。和歌山県白浜にあるアドベンチャーワールドとか、兵庫県姫路セントラルパークのような、自然と切り離された人為的ないわゆるサファリとはまったく規模の異なるものであることは、断るまでもない。いわゆるサファリ・パークのように、人が餌を与えることはなく、ライオンもチーターも、トムソングゼルなどを自ら追って餌食にしなくては生きていけない自然のままの野生動物の世界なのである。つまり、食物連鎖の網の目が複雑に構成されているサバンナの生態系がそこにあるのである。

1990年に入ってから、日本の海外旅行者数は1000万人を突破したといわれているが、アフリカのサファリは、そのうちの何人が占めるのだろうか。観光旅行に関



セレンゲティ・ナショナル・パーク

JOHN G・WILLIAMS 「A Field Guide to the NATIONAL PAKS OF EAST AFRICA」 Collins, 1967 より。

する新聞その他の広告は、毎日多数を見るけれども、アフリカに関するものはまだまだ少ないのが現状であり、実際に応募している者は非常に少ない。

では、日本から距離的に近い東南アジアなら、今日エコツーリズムと称されるようになった観光商品は多いかという、やはり非常に少ないようである。

たとえば、1995年の9月、ボルネオ島へいったが、それは、今日廃刊になった朝日新聞社の『科学朝日』に、ニチメン・トラベル・サービス株式会社が数回広告を出していたのを見たのが発端だった旅である。いわゆるエコツーリズムに参加している人々の行動を観察するのも目的にしていたのであるが、結局筆者夫妻と女性の植物写真を専門とする写真家の3人しか応募しなかったので、ニチメンのスタッフと現地の案内者計5人だけのツアーになり、エコツーリズム参加者の行動観察をするに至らなかった。しかし、ここに述べるべきことのあるツアーにはなった。ツアーをしながらの自由な昆虫採集その他に関する報告は、拙著「ボルネオ島昆虫採集の旅」²⁾に書いたもので、ここではコウモリに関することだけを述べておく。

マレーシアのボルネオ側は、サバ州とサラワク州からなっている。サバ州のセピロックで保護されているオランウータンを見にいったり、キナバル山に登ったりしてから、サラワク州のミルへいき、そこから19人乗りの小型プロペラ機でグヌン・ムルへ移動した。グヌン・ムル国立公園の洞くつを訪れた帰り、山麓途中まで下山して、夕刻5時13分から数1000匹かのコウモリの群れが、次から次へと波状に洞くつから飛び出してくるのを観察した。日によって出現する時間に早晚はあるが、5時前から多くの人々がコウモリの大群の飛翔するのを待

つ。エコツーリズムのバスから20人ほどの日本の女子大生か短大生が、おそろいの服装で降りてオランウータンを見にいこうとしていたのと、キナバル山登山のとき、一人の日本人青年と会ったけれども、コウモリ観察者の人の群れには、日本人は一人もいなかった。

翌年の1996年、マレーシアの半島側、首都のクアラルンプールから車で2時間ほどの距離の所にあるスランゴール州のスランゴール川下流にあるクアラ・スランゴールと呼ばれる地域へ行ったのは、ホテルを見るためであった。

マレー語のホテルは、「api-api」でもよいが、スランゴールのは「kelip-kelip」のほうで呼んでいる。どちらも総称にしかすぎないが、そこで見ることのできるホテルは、学名を *Pteroptyx malaccae* という種で、翅鞘は赤茶色のものである。月夜の晩は観察に不適だが、一般には日没後の1時間ほどあとから、川沿いの樹木間で集団をなすホテルの光が点滅するのを見ることが出来る。ライフ・ジャケットをつけ、手こぎの小船に乗って見に行くのであるが、棧橋のたもとの展示資料と売店のあるあたりの写真撮影はよいが、船に乗ってからの写真は禁止されている。しかし、このホテルを見ることのできる所も、ダム建設が予定されているので、水没してホテル観光はなくなる可能性が大きくなっている。それはともかく、当日何艘ものホテル観光の小船が出ていたが、観光客らしいのは欧米人のみで、日本人はここにもいなかった。

というように、バリ島などへの日本人観光客はずいぶん多くいるのであるけれども、また、クアラルンプールの市内では多くの日本人が来訪してはいるのだが、エコツーリズムに参加する者は、今日でも依然として非常に少ないようであるといわなくてはならない。

ところで、本稿は、いわゆるエコツーリズムに触れてはいるが、エコツーリズムそのものを問題にしようとするものではない。動物ウォッチングにかかわる日本人観光客の有無を述べたのは、減びつつあった日本のコウノトリをめぐる、その保護と、それを将来観光の対象にすることが可能かどうかについての試論を展開するためのリードの部分にしたかっただけである。もしコウノトリを観光対象にすることができるようになれば、動物ウォッチングという観光一般だけでなく、自然保全のあるべき姿にも関心を持っていただけることになるかも知れないと思ったからである。

そもそも観光開発というものは、多かれ少なかれ、自然にダメージを与えるものになる。だが、逆に、ヒトと動物の共存にとって、ある種の観光が、微々たるもののだとしても、少しは、役に立つようになることも、やり方

②洞くつから出てきて飛翔するコウモリの大群

によっては可能ではないかと思っている。その私見をこれから述べることにする。

II ニッポニア・ニッポン

コウノトリについて述べる前に、トキのことを述べておく。

1960年、10円のトキの記念切手が発行されている。それは、この年東京で第12回国際鳥類保護会議が開催され、日本ではアホウドリに加えて、トキが新たに国際保護鳥に指定されたからである。自然保護の徹底していない日本にだけまかせておいたのでは、絶滅の恐れがあるので、世界全体で保護の目を光らせようとしての指定だったといえようか。ちなみに、その前から日本でも保護しようとはされてきた。1934年の天然記念物、1952年の特別天然記念物の指定があったけれども、年々減少していたからである。

1823年、ドイツ人医師のシーボルトが長崎にやってきた。日本を去るとき、多くの標本が持ち帰られ、オランダの鳥類学者のテミンクとシュレーゲルによって、標本の中にあったトキに学名がつけられたのは1835年で、学名は *Ibis nippon* とされた。しかし、その後、イビスという属の鳥たちの仲間でないということになり、1853年、オランダのライヘンバッハにより、その学名は *Nipponia temmincki* と改められた。さらに、1871年、大英博物館のグレイが、トキは近縁種のいない一属一種の鳥だとして、*Nipponia nippon* と改めた。

今日、新潟県佐渡島で1968年に幼鳥が人里に迷いこんだのを餌付してから捕獲して「キン」と命名された雌のトキが、日本産のトキの最後の1羽になった。1999年現在、キンはすでに推定32歳で、人間でいえば100歳以上の長寿の鳥であるから、佐渡トキ保護センターで余生を送れる日々は、もうほとんどないといえよう。国内産のトキは、その死によって、絶滅することになる。

ところで、昔の日本のトキは、最後の産地になった佐渡島だけでなく、日本のあちらこちらに生息していたのである。

1877年、英国のブラキストンなどが北海道で繁殖しているのを報告しており、1900年岩手県宮古で採集した標本が国立科学博物館に保存されており、同じ岩手県の盛岡や秋田県にも、福島県、長野県にも多数生息していたという。石川県や岐阜県、千葉県、徳島県などにも生息していたそうで、東京や神奈川県あたりでも珍しくはなかった鳥だった。都市鳥の研究者唐沢孝一の近著『江戸東京の自然を歩く』³⁾の一節「東京でトキを見る—有害鳥獣だった朱鷺」にも、幕末のアメリカ人ハリス

が、下田から江戸へ向かう途中、トキが群れをなしていたのに驚嘆したことが『日本滞在記』に記されているなど、明治の頃まで、東京にもトキが普通に見られたことが書かれている。

1999年現在、国や学者がトキの生態学的研究を始める前から、新潟県佐渡島のトキの野外観察を1950年代の初期頃から行ってきた新潟県立両津高等学校教諭だった佐藤春雄は、すでに80歳になっており、佐渡トキ保護会の会長である。その佐藤春雄の1978年の著書『はばたけ朱鷺』⁴⁾を見ると、トキの研究史がよくわかるが、研究史の詳細は省く。しかし、昔はトキが多数生息していたから、さまざまに利用されてきたことがわかる部分に興味ぶかいので、それを要約しておこう。

例えば、トキの羽を矢羽根にしていたこと、養蚕でカイコの掃立て用に用いる箒、その他の羽箒があったこと、あるいは装飾用に使われたり、擬餌鉤の毛鉤にも使われたとした部分なのである。さらには、トキの肉が、佐渡島だけでなく、石川県においても、血の薬だとか冷え症の薬だといわれて珍重されていたという。佐渡でキジ1羽が30銭だったとき、トキ1羽は1円20銭で、トキの肉は煮ると汁が赤くなるといわれ、気味が悪くて暗所でなければ食べられない故、一般に「やみよ汁」ともいわれたのを昭和の初めまで狩猟をしていた人などから聞き書きしている。

また、トキがありふれた鳥だったからか、また優雅な色彩を持つ羽であったためか、20年ごとに行われる伊勢神宮の式年遷宮にも、古くからトキの羽が御神宝の剣の装飾に用いられていたと紹介している。太刀の柄にトキの羽2枚を上下よりあてて、赤色の絹糸で巻くのである。1953年の式年遷宮でも、トキの羽が必要となり、1羽だけの捕獲願いが出たときは、佐渡で20羽ほどが生き残っているだけだった。それに対し、文部省、農林省も、神宮の神事だからと貴重な特別記念物の1羽を割愛しようとなったが、佐渡では反対の声が上がり、■製のトキの羽を用いてもらうことにしたという。

やがて、トキはさらに減少していき、ついに全鳥捕獲作戦実施による人工繁殖に至るが、その少し前までの話の詳細は、この佐藤春雄の著書を参照すればよい。また、医学史発掘ノンフィクション『毒蛇』(TBSブリタニカ)で第1回開高健賞受賞後、『続毒蛇』(TBSブリタニカ)や『闘牛の鳥』(新潮社)を書き、1998年の『朱鷺の遺言』(中央公論社)で1999年度大宅壮一ノンフィクション賞を受賞したノンフィクション作家小林照幸のトキの本⁵⁾を参照すれば、さらに種々のトキをめぐる情報を得ることができるだろう。ちなみに、1999年10月11日の深夜に放映されたNHKテレビ「列島ス

ベシヤル：トキが遺したもの——佐渡・保護活動の半世紀」(NHK新潟制作)は、小林照幸がリポーター役であったことをここに記しておく。

トキに関する詳細をその2冊の本に譲るとして、一挙に1999年のトキのひなが誕生した話題に移るとしよう。

トキは、ニッポニア・ニッポンと学名がつけられているが、日本にしかいなかった鳥ではない。かつて旧ソ連の南東部、中国の東北・中央・南東、台湾、朝鮮半島にも分布していた。しかし、日本同様、今ではほとんどが全滅したかのようにになっている。ただ、中国では、いったん絶滅したと考えられていたのが、1981年に再発見された。もともとは、『中国経済動物誌——鳥類』⁶⁾によれば、陝西省の旧葭県一帯に多かったようだが、樹木の伐材や子供たちが巣をこわしたりして、だんだん減ってきたといわれていたが、その陝西省の西安から200キロほど離れた漢中市洋県の秦嶺山脈南面の地において、絶滅したと思われてから17年ぶりの7羽の再発見であった。1999年5月21日の朝日新聞⁷⁾によれば、中国のトキは、140羽となっていたが、1999年9月22日の朝日新聞夕刊⁸⁾の中国通信による記事では、9月10日まで陝西省漢中市で開催された国際トキ保護シンポジウムで明らかにされた羽数は、すでに200羽余りとなっていた。ちなみに、中国のトキは「朱鷲」と呼ぶ。前記佐藤春雄の『はばたけ朱鷲』には、「田所定右エ門のお話では、中国では鴉(Pao)とよばれ……」と記されているが、「鴉」はガンの仲間の俗名で使われることはあるが、トキの名称としては使われていないことをここに断っておく。なお、中国産トキは、かつてフランスのダビッド神父が*Ibis sinensis*と学名をつけたが、日本のものと同種であることがわかってからは、*Nipponia nippon*となっている。

実は、1981年、佐渡で野生トキ5羽を一斉捕獲して以来、自然から野生トキが消えたのであったが、その5羽は、アカ・シロ・キ・ミドリ・アオと命名され、トキ保護センターで飼育されることになった。ミドリだけが雄で、他の4羽は雌である。しかし、キイロとアカはしばらくして死亡、翌年ミドリとシロが交尾するが、1983年シロも死亡する。それで前述のキンとミドリのペアリングが行なわれたが、交尾をしても繁殖させるに至らなかった。1986年アオが死亡して、日本産のトキは、雄のミドリと雌のキンのみが残ったことになる。ところが、その前の1985年、日中野生鳥獣保護会議が行なわれ、トキの保護・増殖に関する協力の合意によって、中国のホアホアを来日させ、キンとのペアリングを進めていたが、交尾しても繁殖には至らなかった。1989

年になるとキンの羽は、普通の白っぽい羽から黒っぽい羽に変わる、いわゆるトキの生殖羽に変化せず、ホアホアを中国に返還した。中国では、すでに人工繁殖が成功しており、総数も42羽になっていたのも、1990年ミドリを北京動物園に送って、そのヤオヤオと交尾させたが、これも失敗する。1994年、今度は洋県から雄のロンロンと雌のフォンフォンが貸し出されたが、ロンロンは日本で客死する。翌年、ミドリとフォンフォンをペアリングさせ、初めて産卵させることになったが、卵はすべて孵化しなかったし、ミドリも死亡する。そしてフォンフォンは中国に返還された。

これが、1999年のトキのひなが誕生するに至るまでの人工繁殖を試みた略史である。

1998年、来日した中国の江沢民国家主席が天皇に雄のヨウヨウと雌のヤンヤンを贈ると表明していたが、その2羽は、1999年1月佐渡トキ保護センターに到着する。洋県のトキ救護飼育センターからで、その飼育繁殖専門家の席詠梅と傳文凱も技術指導のため来日した。2羽のトキは人工繁殖で殖えた個体、いずれも3歳の若いペアであった。

若いペアであったのが幸いしてか、1999年5月21日、ひながついに誕生した。

4月下旬から5月初旬にかけて、計4回産卵した。そのうちの1卵は雄が抱卵中に割れる。それで、他の1卵を孵卵器に入れ、遅れて産卵された2卵は親鳥の孵化にまかせた。しかし、親鳥にまかせたのは、検査の結果、1卵は1週間ほどで発育を中止しており、もう1卵は無精卵であることがわかった。ちなみに、トキは3~10歳までが繁殖可能期間といわれており、雌雄とも抱卵し、孵化に要する日数は約30日(ニワトリは21日)である。

孵卵器に入れたほうから孵化したひなは、その後ユウユウ(優々)と命名され、一連の新聞記事でその成長ぶりもしばしば紹介されてきたので、詳細は省く(参考文献の7)~17)参照のこと)。しかし、カラー写真14枚とモノクロ写真3枚を含む詳しい記事が、『子供の科学』(1999年11月号)¹⁸⁾に、新潟県佐渡トキ保護センター長の近辻宏樹によって書かれているがあるので、参照していただきたい。

とにかく、日本のトキも中国のトキも、同じニッポニア・ニッポンという学名の鳥であるから、中国産のトキの人工繁殖によるトキが、今後多数に達したら、佐渡の山野で自然復帰を可能にしようという期待されているのである。しかし、その夢は、実現するであろうか。小原秀雄女子栄養大学名誉教授のように、1999年8月25日の朝日新聞夕刊¹⁹⁾で「トキで騒いでもすでに遅すぎる」

という人もいる。筆者は、後述する兵庫県のコウノトリに比べて、その夢は絶対実現しないとはいわないが、コウノトリのほうはまだ自然復帰を行いやすいだろうと思っている。

III シュバシコウとニホンコウノトリ

一般にコウノトリと呼ばれているものは、ヨーロッパから中東にかけて繁殖し、アフリカなどに渡るシュバシコウ (*Ciconia ciconia ciconia*) と、中央アジアで繁殖し、中近東に渡るオオシュバシコウ (*Ciconia ciconia asiatica*)、ニホンコウノトリ (*Ciconia ciconia boyciana*) の3亜種が世界に分布している。日本にいるコウノトリは、正式にはニホンコウノトリとすべきだが、これまでコウノトリと略称してきたように、このあともコウノトリと略称で表記し、ヨーロッパのはシュバシコウと呼んで区別する。

日本のコウノトリと同じものは、トキが日本だけのものではなかったように、日本以外にも分布している。旧ソ連のシベリア、中国の東北部、朝鮮半島などで繁殖し、中国南部や日本に稀に迷鳥として渡るものもある。ただし、日本でかつて野生していたのは、渡りをせず日本にとどまる留鳥としてのコウノトリであった。

コウノトリをデザインした日本切手(10円)を見ると、その嘴は黒色だが、シュバシコウは赤色である。

ヨーロッパで幸せを運ぶ鳥、赤ん坊を運んでくる鳥と親しまれてきたシュバシコウは、個体数が多く、日本各地の動物園などでも飼育されている。しかし、ヨーロッパでも、西欧・北欧諸国では、絶滅しかけていたのだが、飼育繁殖による野生復帰が成功して、再び西欧でも多くが見られるようになったのである。最大の個体群は東欧諸国で見られ、10万以上もいるようだ。国立民族学博物館の元同僚の新免光比呂は、東欧とりわけルーマニアをフィールドとする文化人類学者だが、彼もフィールドで、電柱などに営巣しているシュバシコウをしばしば見たと述べている。フランスその他でも、高い屋根や塔上で営巣するようで、『週間朝日百科—動物たちの地球』²⁰⁾にも、フランスのアルザスの教会鐘楼上で営巣しているシュバシコウの写真があったが、農家の人々は、自宅の屋根にこの幸福を呼ぶ鳥が営巣してくれるのを願うそうである。

兵庫県豊岡市で1994年6月に行われたコウノトリ国際フォーラムの報告書『コウノトリ未来・国際かぎ—その野生復帰を求めて』²¹⁾には、オランダのキャサリン・キングが報告した「コウノトリの飼育下繁殖の現状と野生復帰計画：特にニホンコウノトリについて」があ

③イスタンブールの空で飛翔するシュバシコウの群れ

った。興味ぶかいのは、その報告に使用されたスライドに、さまざまな形のシュバシコウに提供された屋根や電柱上に設置する人工巣があったことである。

トルコの人々も、ヨーロッパ同様、シュバシコウが幸福をもたらすと考えてきた。1996年、イスタンブール滞在中、偶然群飛するシュバシコウを見ることがあったが、人と話している最中だったので、リュックからカメラを取りだすまでに飛び去られてしまった。1999年、また同じ8月にイスタンブールを訪れたが、やはり巣作りの時期ではなかったため、チャナッカレなどの近傍の遺跡へいっても、遺跡の柱頭には巣の跡さえ見ることができなかったし、東欧のブルガリア近くまでチャーターした車でいったけれども、ときどき単独で畑や河辺にいるのを見ただけであった。しかし、イスタンブールにもどったある日、夕方食事に出かけようとしたら、連れていた孫が空を見あげて「コウノトリがいる」といった。数100羽のシュバシコウの大群が、北東方向に飛んでいきつつあるのが上空に見えた。カメラを取りだし数枚写真をとったが、望遠レンズに切り換える間はなかったのが残念だった。アフリカ方向への飛行でないようなので、どこかにあるねぐらへ向かっていたのかも知れない。

いずれにしろ、シュバシコウなら、絶滅の危機は今のところないようである。

それに反し、日本のコウノトリの場合は、かつて日本各地に生息していたが、減少の一途をたどってきた。ここでは、その盛衰の詳細について紹介しておく余地はないので、それについては、兵庫県生物学会編著の『県花・県鳥・県樹』²²⁾や但馬コウノトリ保存会・神戸新聞社編著の『コウノトリ誕生—但馬の空、いのち輝いて』²³⁾、豊岡市教育委員会編『舞い上がれ再び—コウノトリの歴史』²⁴⁾などを参照していただくとして、ここでは、ごく簡単に触れるだけにする。

古くから「松上の鶴」とされていたのは、タンチョウなどのツルではなく、鶴すなわちコウノトリのことだっ

④動物園のシュバシコウ

⑤1959年出石川の浅瀬には、人とコウノトリと但馬牛の共生の場面があった（故高井信雄の残した写真から）

た。コウノトリは樹上など高い所に営巣するが、ツルは地上に営巣する鳥なのである。それはともかく、江戸時代には幕府が捕獲を禁じていたので、相当数が生息していたらしく、浅草の浅草寺や上野の五百羅漢の屋根にも巣が作られていたようだ。但馬の国では、出石藩主が繁殖地を鶴山と名付けて禁猟地にしていた。だが、明治以後、コウノトリは急減していく。

鶴山のコウノトリが天然記念物指定になったのは、生息数30羽ほどになった1921年。天然記念物の指定地が養父郡旧伊佐村（現八鹿町）の繁殖地に変更されたのが1951年。その翌年、特別天然記念物に格上げされたときは、20羽ほどに減じている。そして1953年に指定地でなく、種指定に変更された。その後、2基の人工巣塔を建設したり、但馬全域の小・中学生による「ドジョウ1匹運動」が展開され、65万匹ものドジョウが餌として集められたりしたが、文部省文化財保護委員会は、1963年、保護増殖のためのケージ飼育を決定する。初めて自然卵を採集し、人工孵化の試みも行なわれ

たりするが、孵化はしなかった。その後、コウノトリ飼育場も開設され、キャノンネットによる捕獲で2羽の人工飼育が始まり、日本鳥類保護連盟総裁の常陸宮殿下一行が人工巣塔や飼育場を御覧になられたときもある。コウノトリが兵庫県の県鳥に指定されたのは、1965年である。飼育場の1羽は大腸菌のための卵分泌症で、もう1羽はケージの木に激突した打撲による出血で死亡した。この2羽と小浜市で感電死したものの計3羽を東京教育大学農学部教授だった故武藤聡雄が薬害検査を行なったら、塩素とリンの含有量は異常を認めなかったけれども水銀含有量は非常に高いということが判明する。3羽とも餌を通じての水銀剤農薬による慢性中毒があったわけで、水田などの環境汚染が一举に問題化するようになった。ちなみに、当時兵庫県以外では、福井県小浜市などにもごくわずか生息していたが、福井県武生市の最後の野生コウノトリは、1971年に捕獲されて豊岡で飼育された。

さて、兵庫県但馬に話をもどすが、1967年にもキャノンネットで2羽が捕獲され、飼育場に入ってきた野生の2羽も捕獲されたりするなどがあり、昭和天皇と皇太后の御観覧もあつたりするが、1971年豊岡地方最後の野生コウノトリが負傷して飼育場に保護された。翌年、以前鹿児島県徳之島にどこかから飛来したのが捕獲され、鹿児島市立平川動物公園に入園していたものも飼育場に移管されている。

その前後になるが、豊岡では、神戸市立王子動物園から、いわゆるブリーディング・ローンで、中国産の「白鶴」と称されているコウノトリを数回借り入れたり、東京多摩動物公園からも借り入れたりしていたが、人工繁殖は成功していなかった。なお、1971年には、国内産野生コウノトリであった最後の1羽が死亡した。

しかし、1985年、旧ソ連のハバロフスクから兵庫県に贈られ、飼育場に入った6羽の一部が、1989年産卵し、2羽のひなが得られたのである。豊岡では、これが初めての人工繁殖の成功になった。ちなみに、多摩動物公園のほうは、その前の1988年に孵化が成功しており、筆者が民族動物学にかかわる講演を依頼されて同公園にいったときは、すでに毎年孵化してひなが誕生するようになっていた。

今日、豊岡のコウノトリ保護増殖センターで飼育しているのは、すでに60数羽になっていて、そこで生まれ育ったのも30羽ほどになったようである。1999年8月現在では、各地動物園のも含めてだろうが、全国で130羽ほどになっているようだ。また、前記『コウノトリ未来・国際かいぎ』での松島興治郎の国内報告によれば、多摩動物公園や豊岡以外では、大阪の天王寺動植物公

⑥コウノトリ保護増殖センターのコウノトリ

園、豊橋の総合動物公園でも人工繁殖が進められているようだ。

従来、旧ソ連や中国などの野生コウノトリの現存数は、3000羽ほどだろうとされていたが、東京大学の樋口広芳教授とロシア科学アカデミーなどの共同研究で分かった総数は、すでに2000羽ほどに激減していると1999年8月27日の朝日新聞夕刊²⁵⁾が報じていた。それでも、この数はトキに比べると多く、日本での人工繁殖による総数も、即述のように増加しており、トキの日本における人工繁殖が目下孵化して成長したのが1羽というのと異なる状況にあるといえる。今後、コウノトリの人工繁殖による総数をある程度まで増加させることが必要なことは、いうまでもないが、その努力をしつつも、将来の野生復帰の準備が行なわれていなくてはならない。

だが、その野生復帰のための準備はすでに豊岡で進行中なのである。

1998年、筆者が豊岡市の特別天然記念物コウノトリ飼育場からコウノトリ保護増殖センターになった所を訪問したとき、豊岡市教育委員会生涯学習課コウノトリの郷公園推進室の佐竹節夫室長が、そこから約5キロ離れた所で建設中のコウノトリの郷公園を車で案内してくれた。豊岡市東部の丘陵地約165ヘクタールを造成し、繁殖や自然に慣れさせるための非公開の飼育施設や公開の施設も作りつつあったが、詳しくは後述する。所在地は、豊岡市祥雲寺・河谷・百合地地区である。なぜかこちらのほうは、豊岡市教育委員会ではなく、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課がコウノトリの郷公園開設準備担当となっていた。1999年11月1日から一部が公開される予定だったので、今はすでに一部が公開されたはずである。収容しきれなくなった増殖センターのほうから分散飼育されるようになっていたが、それも実行されている。また、上野動物園の園長から麻布大学獣医学部動物応用科学科教授に転じた増井光子が、非常勤で初代園長になることも予定されていたが、1999年4月

⑦整地中のコウノトリの郷公園

にその就任が正式に発表された。

その郷公園の平面図を見ると、その施設の詳細がよくわかる。

非公開エリアは、コウノトリ自然馴化ゾーンとして、飼育管理事務所、各種ケージ、湿地、池のあるコウノトリ野生化ゾーンと、研究・治療施設・検疫施設・入院ケージのある野生化研究センターゾーンがあるが、やはり非公開エリアで、将来野生に帰ったコウノトリが巣を作ったり、生息していくために必要な環境を守るための最も広大な地域を占める自然ゾーンもある。一方、公開ゾーンとしては、自然観察ゾーンがある。それには、公開ケージやピクニック園地を含むセンターゾーンがあり、コウノトリはもちろん、ヒトと自然の共生を学ぶための場を提供することになる。さらには、自然観察ゾーンがあり、豊かな自然を生かして、来園者の自然観察の場を提供しようとする。もう一つは、里山保全ゾーンで、里山や環境作りの実験を体験しながら、ヒトと自然のかかわりを学ぶ場として提供する、となっている。

ところで、この郷公園は、「コウノトリの郷公園（仮称）」とこれまで呼ばれてきたが、1999年4月から「兵庫県立コウノトリの郷公園」と呼ばれることになった。このニュースは、豊岡市教育委員会生涯学習課コウノトリの郷公園推進室が発行してきたニュース・レターの『FLY TO・THE WILD』²⁶⁾の第14号で知った。このニュース・レターは、1999年10月現在までに、第15号まで発行されている。これらニュース・レターを通じて知ることのできたことは、コウノトリの野生復帰を可能にする計画が着実に進んでおり、大いに期待できるということだった。

コウノトリの飼育下から野生化させるための架け橋になること、これがこの公園の実現させようとする目的なのであるが、そのためには、まず屋根のない馴化ケージから飛びだし、もどってくるコウノトリの餌が公園とその周辺に十分なくてはならない。たとえば、ドジョウやサワガニ、カエル、昆虫などが、人手によって与えられ

るものから、水田その他で自然に繁殖できる環境作りで繁殖したのから採餌させられなければ、ほうとうの意味での「野生」化したことにならないだろう。また、公園外に飛んでいって採餌するようになったコウノトリが、農地などで有害な農薬や除草剤を使用していたとしたら、たとえドジョウなどが生息していたとしても、汚染された餌を採餌してしまうことになる。したがって、公園周辺の環境も改善されていなければならない。戦時中、樹木の伐材があってコウノトリの営巣ができなくなったのを思えば、ねぐらにしたり営巣したりすることのできる樹木が十分なくてはならないことも考えられる。

ところが、これらについては、すでに計画がされており、一部の計画は実際に進行させているのである。

たとえば、コウノトリ文化館（仮称）の建築工事も始まった。先端技術で支えられた木造瓦葺きのもので、**二**製や模型、写真などの展示や、但馬牛で農耕を行っていた頃、コウノトリと共生していた人々が使用していた農耕用具なども、すでに寄贈されたものがあり、それらも展示されることになるだろうが、これは一種の博物館であって、コウノトリを中心にした環境教育の場と合わせての「エコミュージアム」になるだろう。環境教育は、外部でもすでにかかわりの大いにある活動が行なわれている。**1999**年**1**月**5**日の神戸新聞²⁷⁾でも報道されたが、コウノトリ市民研究所が豊岡市で**1998**年**5**月に発足している。

この市民研究所のメンバーには、前記佐竹節夫推進室々長がいる。豊岡盆地の生物調査や、生物が生息できる小空間のビオトープ作りなどを、小学生から大人まで、**30**人が会員となつて行なっている。メダカやゲンゴロウ、トンボの調査をやったり、バード・ウォッチングを行なったりしている。その調査結果もさることながら、調査中の面白さ、楽しさがこの市民研究所の「売り」だとされているので、今後は、さらに親子や夫婦での参加が増えることだろう。

これまで、巨樹や巨木とされるものの保護が各地にあった。また、ある種の動物の天然記念物指定があったりするけれども、その種の保護は、真の意味の自然保護にはならないといえる。たとえば、コウノトリならコウノトリとそれにかかわる周辺の環境も保全されていなかったら、コウノトリが天然記念物であろうと特別天然記念物であろうと、無意味になる。だから、コウノトリをめぐる予想される生態系を頭でだけ理解させるのではなく、実践的環境教育を遊びながら体験的に学習してもらうことは、貴重なことになるだろう。

また、公園周辺の水田では、アイガモ農法もすでに行なわれている。これは、**1995**年から行なわれていて、

1999年**1**月現在、それによる稲作面積が**7**ヘクタールになっている。豊岡アイガモ稲作研究会の会員は**16**名になっており、酒米**500**石の栽培試験もしている。農薬や除草剤を使っていないということで**PR**したコメによる経済効果が期待されているのである。コウノトリの保護もしくは、それを中心とした環境保全だけをいくら啓蒙したとしても、周辺の人々に経済効果がないと、つまり地元には収益がなかったら、保護・保全の訴えは成功しないと思われる。もちろん、アイガモ農法が一層普及すれば、ドジョウなどの農薬汚染はまぬかれることになりもする。

なお、**1999**年**10**月**19**日の神戸新聞²⁸⁾で報じられてもいるが、コウノトリ増殖計画の一環としての他の系統のコウノトリが譲渡されたことも述べておかねばならない。

それは、大阪市天王寺動植物公園から、中国の上海産とハルビン産のペアから生まれた幼鳥**3**羽の譲渡である。**1994**年、**96**年の各**1**羽の譲渡につづく**3**回目、これは近親交配による遺伝的劣化を防ぐためだった。この種の譲渡は以前からもあったが、今後ともコウノトリの飼育をしている各地の動物園などに行かない、強いコウノトリの野生復帰に備えねばならない。

1995年から山形県、岡山県、千葉県で行なわれた日本エコミュージアム研究会の第**4**回大会が、**1999**年**6**月豊岡で行なわれたが、前述の「コウノトリ未来・国際かいぎ——その野生復帰を求めて」同様に、**2000**年には、「コウノトリといっしょに暮らすまちづくり国際かいぎ」が豊岡で開催される予定になっている。前回は、オランダ、アメリカ、ロシアなどの研究者を含めた国際フォーラムが**1**日、翌日は市民たちによる「はばたきのつどい——コウノトリが隣にいるってどんな感じ？」も開催され、世界の研究者たちと共同でコウノトリの保全の道をさぐってきたし、地元の人々の関心を盛り立ててきたが、今後ひきつづき、一層の研究と地元の人々の保護・保全のための参加が期待されている。

さらには、兵庫県立コウノトリの郷公園には、研究部門に田園生態研究部を設置した。そのニュースは、**1999**年**10**月**25**日の神戸新聞²⁹⁾にも報じられたが、兵庫県立姫路工業大学の自然・環境科学研究所の池田啓教授がその部長に就任することになった。研究陣もますます充実してきた感がする。

日本のコウノトリが、野生復帰して、シユバシコウのように群飛するのは、まだまだだとしても、その用意はかなり進行しているといえるだろう。

IV 地域振興と組み合わせたコウノトリの観光

コウノトリをめぐっての観光に先立ち、トキをめぐる観光を述べておく。トキが新潟県の県鳥になったのは、1965年9月であったが、コウノトリが兵庫県の県鳥になったのは、同じ年の5月だった。しかし、観光に関しては、トキのほうが先輩格であったからだ。

1995年8月、新潟県でのあるシンポジウムに参加したあと、ついでに佐渡島へいったときの写真を見てみよう。看板は、バス発着所にあったもので、ミニコースの案内のタイトルは「加茂湖八景と朱鷺めきツアー」となっている。ニッポニア・ニッポンつまりトキの大きな写真ポスターの左側には、コースが示されているが、その中には「トキ保護センター」を経由する矢印を見ることができる。その下のキャッチ・フレーズは「日本で佐渡だけ国際保護鳥トキを見に行こう!!」となっており、そのまた下には「今このときにトキを見ておかないと……一生会えないかも知れない朱鷺です。そんな希望をミニコースが応えてくれます。人数制限あり5番窓口へ!!」(傍点筆者)となっている。語呂合わせなどのあるいささかセンスのない看板だが、当時すでに「キン」しかいなかったのであるけれども、トキは観光の対象になっていた。

実は、トキが観光の対象にされてきた歴史はもっと古くからあった。1935年、トキが世間一般に知られるようになる、国際観光客の誘致に大馬力をかけている鉄道省では、佐渡へ観光客をよびよせるのに利用するため、トキの宣伝に乗りだし、佐渡汽船株式会社でも、佐渡は風景やおけさ踊りだけでなく、世界的珍鳥トキの存在することを知らせることによって、観光客誘致の一助にしようと、古川社長は佐渡に渡り、佐渡宣伝にトキまで使われたと前記佐藤春雄はその著書に書いている。また、前記小林照幸の著書のほうでも、1950年、佐渡が国定公園に指定されたのを契機に、一級の観光地にすべ

く、本土の資本を投入して力を入れたとあり、佐渡おけさや文祿人形、説教人形、のろまん人形といった三種類の人形芝居は興味豊かで、地酒も豊富という豊かな食文化もあり、トキも豊かさに一役買い、「天然記念物“朱鷺”が舞う島 佐渡」というキャッチコピーがパンフレットや新聞広告に使われたと述べている。しかし、小林の著書のあとのほうには、1952年の話だが、トキの生息環境は、いつまでも現在のままとは考えられないといい、観光に力を入れているのだから交通基盤整備が山にも進み、トキの生息環境も悪化していくだろうというような話が地元で出ていることも述べている。

いずれにしても、佐渡の観光開発は、観光客誘致に役立ってきたとしても、トキの生息環境はそれ以後さらなる開発によってますます悪化したのであった。観光開発は、前にも述べたが、一般には多かれ少なかれ環境にダメージを与えるものなのである。

佐渡ではないが、1964年、石川県最後のトキになって、その後捕獲され、佐渡に移されて飼育されることになった「能里ちゃん」と命名されたトキは、佐渡で「キン」とペアリングさせられたが、1971年に死亡した。

小林は、能登最後のトキの「能里ちゃん」の生息していた頃からすでに交通基盤整備のために眉丈山の整地が始まっていたが、「能里」死後の眉丈山は、さらに急激に開発され、ゴルフ場の建設も進められたという。ゴルフ場、特に地方のそれは、地方の特色を盛りこむネーミングをする。能登の本土産トキが最後に住んでいた場所でのゴルフ場は、「朱鷺の台カントリークラブ」となり、トキがいたことを顕彰するために、ゴルフ場にはトキの記念碑を建てることまで決まっていたようだ。

「能里」の死後解剖は、新潟大学医学部で行なわれているが、腎臓や筋肉にはDDTやBHCという有機塩素系農薬や水銀が高度に残留していた。「能里」のニ製は石川県にもどり、石川県立歴史博物館に展示されているそうだが、あの一般に農薬・除草剤漬けで芝生が維持されるゴルフ場の「ミドリ」が、「朱鷺の台」となっている、でも、「能里ちゃん」は決して喜びはしないだろう。

さて、コウノトリの話に移るが、即述のように、豊岡では人工繁殖によるコウノトリがすでになんかの数になっており、兵庫県立コウノトリの郷公園もオープンすることになった。

ここでは、観光のための観光開発を問題にするのではなく、コウノトリの野生復帰を中心とした環境保全にとって少しでも役に立ちそうな観光要素を考え、ひいては地域の町おこしの観光開発にもなりそうなものを列挙していきたい。

豊岡での人工繁殖ひなが最初に誕生したあと、コウノ

トリ飼育場ですくすく育ったひなが公開されたのは、1989年の夏だった。前記『コウノトリ誕生』によれば、特別公開の6日間の会期中、過去最高の計8039人が詰めかけ、前年の5・3倍になり、駐車場には関東や九州ナンバーの車も見られたとある。金網越しに体長80センチまで成長したひなの写真をとる者があり、ひな誕生の瞬間や成長ぶりのビデオ録画を放映したのに子供たちが集まり、入り口に設けられた“コウノトリグッズ”コーナーも人気を集めていたようだ。

そのにぎわいぶりの写真数枚を点検すると、コウノトリグッズなるものは、ステッカー、Tシャツ、テレホンカードであった。Tシャツには、2羽のコウノトリが飛んでいるところがデザインされており、Happy storksと文字がプリントされている。

そこで、いわゆるおみやげなる観光要素から始め、おみやげの売上げ増が地元の経済効果を高めるためにどうすればよいかを考えたい。日本は、おみやげ文化の豊かな国で、狭い国土ながら、各地にさまざまな風物や名物をモチーフにしたおみやげがそろっているが、こんな国はめったにない。泉麻人著『ニッポンおみやげ紀行』³⁰⁾のように、おみやげに関する出版物までいろいろあるのも、世界的に珍しい。それで、コウノトリにかかわるものも作ってもらいたいのである。

絶滅に瀕している高知県のカワウソをデザインした箱カバーを貼った「カワウソもなか」が、四万十川へいつ

たとき売られていた。長野県佐久へいったときは、稲田養鯉で有名だった佐久のコイをモチーフにした「佐久鯉サブレ」などがあった。だから、泉麻人の本にも紹介されている「鎌倉発の超定番東京ミヤゲ」の「鳩サブレ」のように、コウノトリの形を模した「サブレ」もしくは「サブレー」でもよい。地元で知恵を出しあって、センスがよく、コウノトリの野生復帰に関心を持ってもらえるPRのことばを印刷した説明文も入れてあるおみやげを作ってもらえたらと思っている。

日本は、駅弁文化の豊かな国でもある。各地にさまざまな駅弁があり、駅弁の本もいろいろとある。これも、世界的に見ると、珍しい文化になるといえようか。そこで、次は駅弁についてである。

兵庫県の丹波篠山は、イノシシの「ぼたん鍋」が有名な所である。狩猟が解禁になる11月15日から、篠山にあるイノシシ肉を売る店やぼたん鍋を出す観光旅館の玄関には、獲物のイノシシがまるごとごろんと数頭並べて置かれていることすらある。そういう所であるから、篠山口駅では、年中ではなく、毎年12月から3月までのシーズンに「ぼたんめし」という駅弁が売られている。イノシシ肉が入っているだけでなく、容器がイノシシの頭の形になっているのが面白い。

豊岡駅や城崎駅の駅弁には、季節限定のズワイガニの駅弁がある。あるいは、やはり名物である但馬牛のステーキの入ったものもある。これらと競合することになろうが、コウノトリ関連の駅弁もほしいところである。まさか、コウノトリの肉を使うわけにはいかないが、前述のアイガモ農法を盛んにする工夫をすれば、コウノトリの野生復帰のために必要なよい環境作りのために役立つアイガモを駅弁に利用できる。

ところで、アイガモ農法とはどんな農法なのだろう。詳細に知りたければ、古野隆雄の『合鴨ばんざい——アイガモ水稲同時作の実際』³¹⁾とか、山根瑞世の『ルポ合鴨列島——農業の愉快な道、新しい道』³²⁾を参照すればよい。ここでは、ごく簡単に拙著の『文化としての食と旅』³³⁾で書いたことをかいつまんで述べるだけにする。

これまで業界のアイガモの定義は、あいまいであったが、アイガモ農法で用いるアイガモは、鹿児島大学の萬田正治教授が定義した「アヒルの仲間と野生のカモ類の交雑種、それも人間の管理下におかれているもの」だけをいう。それでは、アイガモ農法であるが、それは、アイガモのひなを水田に放す農法だ。水田には、電気柵などの囲いがあるが、外敵からアイガモを守る。外敵は野犬などである。ひなは、水田の中を泳ぎまわり、雑草と害虫を食べて大きくなる。こわい除草剤を使わなくても、腰をかがめてたいへんだったかつての草取りの代り

⑨高知の「カワウソもなか」

⑩佐久の「佐久鯉サブレ」

になる。殺虫剤も省かれる。排出された糞は、肥料になるので肥料代も浮く。しかも、成長したらかえってイネを倒したりするので、翌年また使うということはなく、アイガモの成長したものは、食用として売るのである。

無農薬栽培のイネが、このようないわゆる地球にやさしい農法で収穫されるとすれば、この農法はどんどん普及してきそうな感がするであろう。しかし、われわれの眼前には、水田にアイガモのいる姿はほとんど出現していないのである。普及していない理由は、日本の食文化がネックになっているように思われる。

確かに、その一部は、そば屋のカモ南蛮になるんだろう。スーパーなどにも、わずかだがその肉が売られている。だが、それはロースの生肉か、燻製品である。非常に少ない例としては、串焼きというものもあったが、内臓の販売などは、まだ一度も見たことはない。

ニワトリなら、足とかトサカは別として、ヤキトリ屋で皮まで食べているが、カモ南蛮の材料はロースのみ。アイガモは、まだ日本人の食の価値体系、すなわち食文化の一部になっていないのである。もし、これから日本人がニワトリ同様にアイガモの各部位を利用するとなれば、アイガモ農法も栄えるはずだが、今日の食文化のままでは、日本の食文化が普及のネックになるのである。

中国では、たとえば、北京ダックの「北京鴨」だけを見てもわかるが、アヒルの全部利用がある。「北京鴨」は「北京 \blacksquare 鴨」ともいう。「 \blacksquare 」は装 \blacksquare を意味し、団子状の餌を昔は嘴を開いて強制的に詰め、あまり運動させずして、短期間で肥らせた。今日、強制給餌は、ペダルを踏む装置を使うが、基本は同じ。そのアヒルをオープン式の炉の「掛炉」であぶった「 \blacksquare 鴨」が、フルコースの場合のメインになる。コムギ粉製のクレープ状の「荷葉餅」に味噌状の「甜麵醬」を塗り、ネギとキュウリの細切りと、薄くそがれた皮付き肉をのせ、巻いて食べる。「炒鴨腸」は腸の、「炒鴨肝」は肝臓の、「鴨芍」は砂囊の、「鴨心」は心臓の料理で、みずかきの「鴨掌」や、舌の「鴨舌」を集めた料理も出る。骨もスープの「鴨骨湯」のダシになる。ただ、血液の「鴨血」は、この席に出ないが、その凝固したものは別に売られていて、ブタやニワトリの血液の凝固したものと同じように、スープ種にしたり、その他の料理に用いられる。

もし、日本でも、アイガモがこの北京ダックのように愛好され、かつ全部位を利用するようになれば、アイガモ農法で育ったアイガモは大きな商品価値が生じるものになり、アイガモ農法も普及していくことになるだろう。

したがって、コウノトリの野生復帰のための環境が、普及したアイガモ農法による水田がほとんどであるとい

①出石の「そば雑炊」

う状況に近くなれば、ドジョウやカエルなどはアイガモは食べないので、コウノトリの餌、それも農薬などに汚染されていない餌が確保されるし、食用にするアイガモ成鳥の販売で地元も潤うということになる。

そういうことを実現させるためには、アイガモ料理を工夫しなければならない。なにも北京ダックの料理のまねをしなくてもよい。日本人に好まれるアイガモの各部位の料理を地域の人々で創意工夫すればよいのである。そして、それを駅弁に活用する。あるいは、近くの出石のそばを使った「アイガモ南蛮」なり、なんなりを考えるのもよいだろう。そうすれば、受益地域はさらに拡大するはずだ。出石の皿そばだけでなく、出石では、四国の祖谷地方に残る古代食の粒食のそば雑炊を作る店もわずかあったから、アイガモを使った「アイガモそば雑炊」などもよいかも知れない。

アイガモをブランドにしたコメについては前述したが、農法が拡大すれば、そのコメも販路を拡大できるほどの収量になるだろう。

このように考えていくと、観光開発はダメージを与える面ばかりではなく、観光要素を補強することによってコウノトリの保護にも役立つという面が現れる。

先に紹介したコウノトリ文化館では、その一角を用いて、日本の伝統的小鳥の芸である「ヤマガラ芸」なども復活させ、来園・来館者に見せるのも観光要素の一つにすることができるだろう。

詳細は省くが、拙著『民族動物学ノート』³⁴⁾や『民族動物学——アジアのフィールドから』³⁵⁾において、ヤマガラ芸を述べているので、参照していただきたい。なお、ヤマガラ芸をタイトルにするほど詳しく書かれた小山幸子の好著『ヤマガラ芸——文化史と行動学の視点から』³⁶⁾を参照すれば、さらに詳しいことを知り得るであろう。

いずれにしろ、今は消滅したヤマガラがお宮の鈴を鳴らし、賽銭を入れ、おみくじを引くという一連の芸は、かつて縁日などでよく見かけたが、野鳥の捕獲許可で捕

獲したのを調教して、伝統芸の復活をすれば、それは郷公園で環境教育を遊びながら、体験しながら身につけようとする人々への、一種の観光の目玉にもなるだろう。現時点なら、東京大学で非常勤共同研究員などを行っている小山幸子理学博士が、調教指導をすることもできるのだから、そういうことも住民参加型で、ボランティア調教者にやらせるのを試みてほしい。

なお、出石郡但東町では、但馬という地方から全国への情報発信を目指して、1996年にすばらしい日本・モンゴル民族博物館を開館させている。この博物館は、ただモンゴルの民族資料を展示するだけでなく、モンゴルから実習生を迎えたりするなど、世界に目を向けた小さな博物館を目指している。開館の前、筆者や同僚だった国立民族学博物館の数名の教授・助教授も、博物館設置の相談にのったことがあるが、地域文化振興の拠点としての役割を果たしている博物館なのである。

だから、豊岡・出石・但東町などを含めて、但馬のいわゆる町おこしのために、これらの地域が相互の提携を進めるとすれば、コウノトリその他のよい意味での観光がさらに期待できるし、コウノトリの保護と環境保全もまたうまくいくだろうと思われる。

V おわりに

民族自然誌研究会のエコソフィア編集委員会が編集している『ECOSOPHIA——自然と人間をつなぐもの』第4号は、エコミュージアムを特集しているが、それに、国立民族学博物館初代館長を経て同館顧問になっている梅棹忠夫と山極寿一京都大学大学院理学研究科助教授の対談「21世紀の地球博物館——地域と地球を考える」³⁷⁾があった。

司会者が「今日は、バーチャル博物館の可能性という話が出てきましたね」というのに応じて、梅棹は「基本的に、自然科学系の博物館はバーチャルな体験をさせる装置だね。本当に生の自然に人々を放りだしたら、いろんな変なことが起こる。装置としての自然をつくって、あらかじめ体験させるというのもひとつの方法かもしれない。いわばお化け抜きのお化け屋敷。自然にはお化けに近いようなものがいっぱいあるからね」と述べている。

筆者は、前でコウノトリの郷公園のことをいわゆるエコミュージアムだといった。そこは、生の自然ではなく、二次的自然もしくは田園生態系のもとにあるのだが、このエコミュージアムも梅棹のいうお化け抜きのお化け屋敷になることが期待されているのである。

そこでは、地域の人々の住民参加型の活動が最も大切

⑫ タイルの佐久鯉

だと思われる。住民たちそれぞれが、素人の博物館学芸員であり、地域振興の主体にならねばならない。兵庫県や、豊岡、出石、但東町などの行政のほうも、タテ割り行政を気にせず、提携していく努力もまたなくてはならないが、象徴的には、せめて長野県の佐久が舗道のタイルにコイをデザインしたのを使っているように、県鳥コウノトリのマンホールの蓋やタイルぐらいを作るのも試みてもらいたい。

さて、「I はじめに」のしめくくりのあたりで述べてはいるが、その章に出てきたエコツーリズム的動物ウォッチングに関する観光の話は、あとで述べようとするこの単なるリードの部分にしかすぎないのであった。

コウノトリの話を終えた今、前後がどのように呼んでいるかを指摘しておかねば、本稿は一貫性のないものになってしまう。

ごく簡単に結末をつけておくとすれば、初めあたりの話は、一次的自然もしくはそれに近い自然における動物のウォッチングという観光の話であり、コウノトリの話は、二次的自然においてコウノトリの野生復帰が可能になれば、その二次的自然でのコウノトリウォッチングという観光が可能になるという話である。相互に対比させられた関係になっているにすぎないということで、辻褄を合わせたことにしておきたい。

いずれにしろ、本稿は、いわゆる論文としての形式・内容を無視して書かれた、私見を含むものだった。したがって、厳密な意味での整合性を追求していないのを了承していただけたらと、叱責を受けない前に断わっておかねばならない。

参考文献

- 1) 周 達生「タンザニア・ノート」
 - <1>「観光立国」『神戸新聞』(夕刊) 1971年8月31日
 - <2>「キリマンジャロに登る」『神戸新聞』(夕刊) 1971年9月7日
 - <3>「スワヒリ語」『神戸新聞』(夕刊) 1971年9月14日

- く4)「ゲーム・パーク」『神戸新聞』(夕刊)1971年9月21日
- く5)「心やすい人々」『神戸新聞』(夕刊)1971年9月28日
- 2) 周 達生「ボルネオ鳥昆虫採集の旅」『UP』(東京大学出版会)283号,1996年5月5日,19-23頁
 - 3) 唐沢孝一『江戸東京の自然を歩く』中央公論新社,1999年,202頁
 - 4) 佐藤春雄『はばたけ朱鷺——トキ保護の記録』研成社,1978年,220頁
 - 5) 小林照幸『朱鷺の遺言』中央公論社,1998年,349頁
 - 6) 鄭作新主編『中国経済動物誌——鳥類』科学出版社(北京),1963年,696頁(図版を除く)
 - 7) 『朝日新聞』1999年2月21日,「みんなのQ & A——トキ」
 - 8) 『朝日新聞』1999年5月21日,「トキの赤ちゃん——つついて見えた?外は広いよ」
 - 9) 『朝日新聞』(夕刊)1999年5月21日,「日中友好のトキ生まれるよ」
 - 10) 『朝日新聞』1999年5月22日,「ひと——トキの孵化を指導した席咏梅さん」
 - 11) 『朝日新聞』1999年5月22日,「小さな命大きな期待——トキ誕生まだスタート」
 - 12) 『朝日新聞』1999年5月22日,「種の保存へ新たなトキ——ヒナ誕生」
 - 13) 『朝日新聞』(夕刊)1999年5月22日,「“ごちそう”味いかが?トキのひな“初食事”」
 - 14) 『毎日新聞』1999年6月1日,「21世紀への伝言——記者たちのメモワール,トキへの挽歌——絶滅を早めた全鳥捕獲」
 - 15) 『朝日新聞』1999年6月24日,「背景を解く——トキ人工繁殖の行方は」
 - 16) 『朝日新聞』(夕刊)1999年9月22日,「200羽まで増加——中国のトキ」
 - 17) 『朝日新聞』1999年10月8日,「トキ野に群れ飛ぶ——中国内陸部の洋県」
 - 18) 近辻宏典「トキ“優優”の成長を追う」『子供の科学』(誠文堂新光社)第62巻第11号,1999年11月,47-54頁
 - 19) 『朝日新聞』1999年8月25日,「21世紀序奏——野生生物保護,トキで騒いでもすでに遅すぎる(小原秀雄)」
 - 20) 上野俊一ほか編『週刊朝日百科,動物たちの地球15,鳥類 I③サギ・コウノトリ・フラミンゴほか』朝日新聞社,1991年,33頁
 - 21) コウノトリ未来・国際かいぎ実行委員会編『コウノトリ未来・国際かいぎ報告書』同委員会発行(非売品),1995年,67頁
 - 22) 兵庫県生物学会編著『県花・県鳥・県樹』のじぎく文庫,1967年,154頁
 - 23) 但馬コウノトリ保存会・神戸新聞社編著『コウノトリ誕生——但馬の空,いのち輝いて』神戸新聞総合出版センター,1989年,101頁
 - 24) 豊岡市教育委員会編『舞い上がれ再び——コウノトリの歴史』1994年,31頁
 - 25) 『朝日新聞』(夕刊)1999年8月27日,「野生の鳥も住まい大切——繁殖地でコウノトリ激減,中継地などルート守れ……」
 - 26) 豊岡市教育委員会生涯学習課・コウノトリの郷公園推進室『FRY TO・THE WILD』第1号~第15号,1998年~1999年
 - 27) 『神戸新聞』1999年1月5日,「残そう,緑の遺産——ひょうごの環境保護グループ②,コウノトリ市民研究所」
 - 28) 『神戸新聞』1999年10月19日,「増えよコウノトリ願ひ乗せて,豊岡の県立公園,幼鳥3羽譲り受け」
 - 29) 『神戸新聞』1999年10月25日,「はばたけ再び但馬の空へ——県立コウノトリの郷公園,豊岡に来月オープン」
 - 30) 泉 麻人『ニッポンおみやげ紀行』大和書房,1999年,279頁
 - 31) 吉野隆雄『合鴨ばんざい——アイガモ水稲同時作の実際』農山漁村文化協会,1992年,150頁
 - 32) 山根瑞世『ルボ合鴨列島——農業の愉快な道,新しい道』ダイヤモンド社,1994年,206頁
 - 33) 周 達生『文化としての食と旅』清水書院,1998年,221頁
 - 34) 周 達生『民族動物学ノート』福式書店,1990年,384頁
 - 35) 周 達生『民族動物学——アジアのフィールドから』東京大学出版会,1995年,234頁
 - 36) 小山幸子『ヤマガラのはらけ——文化史と行動学の視点から』法政大学出版局,1999年,212頁
 - 37) 梅棹忠夫・山極寿一「21世紀の地球博物館——地域と地球を考える」『ECOSOPHIA——自然と人間をつなぐもの』(昭和堂)第4号,1999年11月,43-52頁